

## 太宰治「パンドラの匣」論

### ——塚本虎二「われらの新秩序」の受容を中心に——

小林 初音

はじめに

太宰治の「パンドラの匣」は、一九四五年の一〇月二二日から翌年の一月七日まで「河北新報」に掲載された作品である<sup>(注1)</sup>。「パンドラの匣」の前身である「雲雀の聲」は太平洋戦争開戦直後を舞台に、一九四三年ごろに執筆された作品であったとされるものの、空襲によって発表前に焼失したため、詳細は明らかになっていない<sup>(注2)</sup>。

この「雲雀の聲」の校正刷りに改変を加えて発表されたのが「パンドラの匣」である。「雲雀の聲」および「パンドラの匣」はともに、太宰文学の読者であった青年・木村庄助氏の結核療養所での日々を綴った『木村庄助日誌』<sup>(注3)</sup>に着想を得ており、作中人物のモデルとなる人々の姿や療養所での日々が記されている。日誌中には「パンドラの匣」の展開と一致する箇所もあ

り、底本として用いたであろうことが指摘されている<sup>(注4)</sup>。しかしながら、本作品の随所に登場する聖句引用やキリストについての記述は、この『木村庄助日誌』にはない。つまり、作中の聖句とキリスト教に関する記述は、太宰によって組み込まれたものであるといえ、作品研究のうえでは無視できない要素であると考えられよう。

太宰文学と聖書のかかわりを考えるうえで重要な位置にあるのが塚本虎二、および塚本が主筆した雑誌「聖書知識」の影響である。東郷克美氏は、「太宰と聖書、キリスト教とのかかわりのうえで、内村鑑三や塚本虎二の「聖書知識」のもつ意味は、予想以上に重要なものがある」とし<sup>(注5)</sup>、田中良彦氏らの対照調査を紹介している。特に、田中良彦氏による調査研究<sup>(注6)</sup>では、「パンドラの匣」と「聖書知識」の本文が類似している箇所二点が明らかとなっている。どちらも一九四三年発行の「聖

「書知識」からであり、一点目は五月発行の「日本の基督教」という論文から、二点目は一〇月発行の「ルカの旅行記 第二 イエスの弟子たる條件―すべてを棄てよ」という聖書研究の項目からの引用である。この二点が「聖書知識」の記述と類似することについて、田中氏は次のように述べている。

「パンドラの匣」における聖書の研究をしなかったところに日本の敗北の原因を求めるという考え方は「聖書知識」一六一号（昭和十八年五月）における勝利の為には日本精神が基督教を取り入れるべきであるという考え方と表裏一体の関係にあると思われる。また、マタイ福音書八章二〇節（またはルカ伝九章五八節）を「一日も安住をゆるされない」とする「パンドラの匣」の解釈は「何處にいつても心を休めるホームが無い」とする「聖書知識」一六六号（昭和十八年十月）の解釈に似ているように思える。<sup>（注7）</sup>

田中氏の研究によって、「パンドラの匣」に「聖書知識」の本文受容が認められることが明らかになっている。

しかしながら「パンドラの匣」と「聖書知識」のかかわりについては、問題も残されている。その一つが、「聖書知識」受容の時期として購読以前の受容もみとめられるのではないか、という問題である。

田中氏は、太宰が「聖書知識」の購読を開始した時期として「太宰は一九四一年より塚本虎二の主宰する『聖書知識』の購読を始めた」<sup>（注8）</sup>と述べている。太宰の妻・津島美知子氏の回想記にも、「聖書知識」が届き始めたのは、昭和一五年からではないかと思う」との記述がある。<sup>（注9）</sup>

また、田中氏は太宰が「聖書知識」の購読に至った経緯について次のように言及している。

さて太宰が「聖書知識」と邂逅したのは、船橋在住時の昭和十年八月鰭崎潤氏を介してである。帝国美術専門学校の学生だった鰭崎氏は、同級生で太宰の義弟にあたる小館善四郎の仲立ちで太宰と交友を結んだ。鰭崎氏は塚本の日曜集会に参加しており、「聖書知識」の愛読者でもあった。（中略）昭和十四年一月太宰は石原美知子と結婚、甲府に新居をかまえ、後、同年九月に三鷹に転居した。三鷹時代は太宰と「聖書知識」との関わりが以前よりも密接になる。それは小金井在住の鰭崎氏が始終太宰を訪問し出した結果である。ミケランジェロ、グリューネワルト等の画集を携えては太宰を訪れた鰭崎氏は、「聖書知識」発行の度に、太宰のために購入、寄贈していたという。<sup>（注10）</sup>

田中氏は右の資料のなかで、太宰が一九三五年には「聖書知

識」と出会っていたこと、一九三九年に三鷹へ転居後はより密接にかかわっていたことに加えて、蛸崎潤氏の寄贈により、手元に「聖書知識」があったと考えられることも示している。

先行論には、いまだ一九四一年以前の「聖書知識」受容について言及がない。しかしながら、購読以前から密接にかかわっていたことを考えると、受容の時期についてはより厳密に調査する必要性があろう。

以上に示したような受容にかかわる問題について、本稿では購読の前年である一九四〇年の「聖書知識」に発表された「われらの新秩序」を用いて考察を行う。この資料には「パンドラの匣」に示された〈自由思想〉や〈かるみ〉に通じる主張および語彙が使用されており、作中で描かれるひばりの価値観を理解するうえで重要な要素であると考えられる。したがって、「パンドラの匣」本文との対照を中心に、受容の時期や程度、特に受容の範囲がひばりの価値観を構成する部分にまで及ぶのか考察する。

本稿の考察によって、文脈上の共通性だけではなく、作中の内部、特に〈かるみ〉というひばりの価値観を構成する要素にも「聖書知識」の受容がみとめられることを明らかにし、また、上記を説明することで、現在までの先行論における〈かるみ〉

解釈とは異なる観点から〈かるみ〉の問題を考察したい。

なお、本稿における傍線部はすべて論者による。

## 一 「われらの新秩序」の発見とその意義

論者は「パンドラの匣」と「聖書知識」とのかかわりを調査する中で、先行研究において言及のない「われらの新秩序」という資料を発見した。「われらの新秩序」は、一九四〇年八月発表の「聖書知識」一二八号に巻頭論文として掲載されている。

この「われらの新秩序」と「パンドラの匣」とのかかわりを見ることの意義として、作中に登場する人物の価値観である〈自由思想〉および〈かるみ〉の本文と共通する主張があること、また、「パンドラの匣」の〈かるみ〉に受容の影響関係があると考えられることが挙げられる。

本節では、「聖書知識」に掲載された巻頭論文「われらの新秩序」の紹介を通じて、「パンドラの匣」と第二節以降の本文対照を行う準備として、両者の共通性を示すことを目的とする。次に示す「われらの新秩序」の冒頭部分では、巻頭論文で用いられる「新秩序」について次のように説明されている。

今や世を舉げて新秩序時代と化した。大にしては世界地圖

の塗りかへ、新國家ブロックの形成、一國の政治外交經濟等々の機構の建直し、これを小にしては學校會社家庭の末に至るまで、新秩序の樹立が唱へらるるに至つた。まさに二十世紀のノアの洪水である。思へばこの世紀も既に中半に近い。この邊でひとつ凡てを根本的に考へ直してみるのも、決して無駄ではあるまい。<sup>(注11)</sup>

右の本文にもあるとおり、「われらの新秩序」の内容は、社会が新たな政治体制や社会機構、総じて「新秩序」を掲げる時代に、聖書の知識も含めつつ改めて「新しさ」について捉え直す、というものである。「バンドラの匣」のなかで「新しさ」というと、ひばりによつてたびたび言及される〈新しい男〉という価値観が想起される。〈新しい男〉とは、戦時中に結核を患い、国に報いることができない自らを「余計者」と卑下していたひばりが、終戦の報を契機として得た価値観である。その多くはひばり自身の生き方や行動を「こうあるべき」と定義するもので、「新しい男は、思い切りがいいものだ」<sup>(注12)</sup>「あたらしい男は、女に對して、ちつとも自惚れてゐないのだ」<sup>(注13)</sup>というように、自らの在り方や行動を示すのである。

しかしながら、自身を〈新しい男〉として定義するというひばりの行為がエスカレートし、〈新しい男〉の定義を狭めてし

まうことは「幕ひらく」でひばりが言及した次のような考え方と重なるものであると同時に、〈新しい男〉という価値観の限界性を示す事にも繋がってしまう。

ひばりは、作中冒頭で「ひとの行為にいちいち説明をつけるのが既に古い「思想」のあやまりではなからうか。無理な説明は、しばしばウソのこじつけに終つてゐる事が多い。理論の遊戲はもうたくさんだ」<sup>(注14)</sup>と述べており、〈新しい男〉として自らの行動を限定することが、かえつて〈新しい男〉という価値観の裏側にある「古さ」を強調させる結果となっている。

「われらの新秩序」で述べられる「新しさ」も、〈新しい男〉というひばりの価値観、またそれを否定する〈かみみ〉の説明に通ずるところがあると考えられよう。例として、「われらの新秩序」では、「新しさ」について次のような主張が展開されている。

（前略）しかしながら茲に注意せねばならないのは、うつかりすると、新しいとばかり思つてゐるものが、思ひもよらず舊い舊いものであつて、前進と思ひながら却つて後退しつゝあることが尠くないことである。伝道之書はその古典的箇所に於て次のやうに言ふ――

日の下には新しき者あらざるなり。見よこれは新しき者

なりと指して言ふべき物あるや。それは我等の前にありし世界に既に久しくありたる者なり。(一・九—一〇) (注15)

「新しい」とばかり思つてゐるものが、思ひもよらず舊い舊いものであつて、前進と思ひながら却つて後退しつつあることが尠くない」とする塚本の主張は「パンドラの匣」において、自らを〈新しい男〉として定義し、「こうあるべき」という在り方を限定していったひばりの〈新しい男〉としての限界性と重なり合うものであるといえる。

このように、「パンドラの匣」と「われらの新秩序」は、内容の上でも共通性をもつものであると考えられる。〈自由思想〉などの聖書やキリスト教がかかわる部分にも塚本の聖書解釈を論じる「聖書知識」の受容を読みとることも可能であろう。第二節・第三節では、「われらの新秩序」の本文対照を通じて、文脈上のみでなく、内容面にも受容の発露がみとめられることをより詳細に分析・考察する。

## 二 〈自由思想〉と〈新秩序〉の共通性

本節では、「パンドラの匣」と「われらの新秩序」の本文対照から、「聖書知識」、あるいは塚本虎二によって展開された聖

書解釈受容の様相を探る。

次に示す本文は、結核療養所でひばりと同室の患者たちが集まって会話を交わしている場面である。この部屋で最年長の越後獅子の、次のような発言がある。

眞理を追求して闘つた天才たちは、ことごとく自由思想家だと言へる。わしなんかは、自由思想の本家本元は、キリストだとさへ考えてゐる。思ひ煩ふな、空飛ぶ鳥を觀よ、播かず、刈らず、藏に收めず、なんてのは素晴らしい自由思想ぢやないか。わしは西洋の思想は、すべてキリストの精神を基底にして、或ひはそれを敷衍し、或ひはそれを卑近にし、或ひはそれを壞疑し、人さまさまの諸説があつても結局、聖書一卷にむすびついてゐると思ふ。 (注16)

越後獅子は傍線部において、「自由思想の本家本元は、キリストだとさへ考えてゐる」と主張したうえで、聖書的重要性を説く。〈自由思想〉とキリストを結び付けるといふ特徴的な考え方であるが、この発言に対応する「われらの新秩序」の箇所として、次の本文が考えられる。

私達の信ずる所によれば、眞の意味に於ける新秩序の建設者は主イエス・キリストであつた。彼によつて見ゆる見えざる世界の凡ての秩序が全然顛倒された。大は小に小は大

に、低きは高く高きは低く、力ある者は無力に無力なる者は権力者に。<sup>(注17)</sup>

以上に挙げた「パンドラの匣」と「われらの新秩序」の本文における共通性を指摘する。塚本の著作集<sup>(注18)</sup>を確認したところ、「眞の意味に於ける新秩序の建設者は主イエス・キリスト」であるとする記述は「われらの新秩序」にしか登場していなかった。また「われらの新秩序」の本文と「パンドラの匣」の「自由思想の本来本元はキリストだとさへ考えてゐる」という本文は、どちらも「根幹となる価値観」を作った者として「キリスト」を挙げて論じている点において共通性があるといえる。「根幹となる価値観」とは、「パンドラの匣」ではひばりを含む男性たちの掲げた「自由思想」、「われらの新秩序」では「新秩序」がこれにあたる。

しかしながら、以上の本文のみでは「パンドラの匣」における「自由思想」と「われらの新秩序」における「新秩序」の示している事柄が同じであると断定することは困難であろう。果たして「自由思想」と「新秩序」は内実が同じものとして捉えられるのか、という課題について、次に示す本文対照から確認する。初めに、「パンドラの匣」における該当部分の本文を示す。

「自由主義者つてのは、あれは、いつたい何ですかね？」

と、かつばれは如何なる理由からか、ひどく聲をひそめて尋ねる。

「フランスでは、」と固バンは英語のほうでこりたからであらうか、こんどはフランスの方面の知識を披露する。「リベルタンつてやつがあつて、これがまあ自由思想を謳歌してずゐぶんあばれ廻つたものです。十七世紀と言ひますから、いまから三百年ほど前の事ですがね。」と、眉をはね上げてもつたいぶる。「こいつらは主として宗教の自由を叫んで、あばれてゐたらしいです。」

「なんだ、あばれんばうか。」とかつばれは案外だといふやうな顔で言ふ。

「ええ、まあ、そんなものです。たいていは、無頼漢みたいな生活をしてゐたのです。芝居なんかで有名な、あの、鼻の大きいシラノ、ね、あの人も、あつた時のリベルタンのひとりだと言へるでせう。時の権力に反抗して、弱きを助ける。當時のフランスの詩人なんてのも、たいていもうそんなものだつたのでせう。日本の江戸時代の男伊達とかいふものに、ちよつと似てゐるところがあつたやうです。」

(中略)

「いつたいこの自由思想といふのは、」と固バンはいよいよ

よまじめに、「その本來の姿は、反抗精神です。破壊思想といつていいかも知れない。壓制や束縛が取りのぞかれたところにはじめて芽生える思想ではなくて、壓制や束縛のリアクションとしてそれらと同時に發生し闘争すべき性質の思想です。」(注19)

つづいて、「われらの新秩序」で対応する箇所を示す。次の本文では、人が陥りがちな「舊秩序舊體制」を破壊することに対する歡迎の意とその理由について述べている。

人は活物であるから、日に新しく、日に日に新しくなければならぬのに、ともすれば耽つべき慣性の法則に支配され、古い殻の中に閉籠つて安を偷みがちである。資本家はその資本主義に、政治家は住み慣れた政治體制に、宗教家は舊き傳統に。この故に時々善惡色々の偉大なる亂暴者が出現して、世界の舊秩序舊體制を滅茶苦茶に叩き壊すことは寧ろ必要である。これによつて弱者を縛る不法の鎖は切り斷たれ、下積の者は社會の上層に浮び出ることが出來、斯くしてまた今まで棄てて顧みられなかつた石が隅の首石となる機會が生ずるからである。(注20)

「善惡色々の偉大なる亂暴者が出現して、世界の舊秩序舊體制を滅茶苦茶に叩き壊すことは寧ろ必要である」という部分

は、先に挙げた〈自由思想〉の説明に共通する「破壊」の性質を持つているといえる。さらに、「これによつて弱者を縛る不法の鎖は切り斷たれ」る、という主張は、「パンドラの匣」で述べられている「弱きを助ける」自由主義者の特徴と共通していると考えられる。

また、「パンドラの匣」本文の「自由思想の本来本元はキリストだとさへ考えてゐる」と、「われらの新秩序」の「眞の意味に於ける新秩序の建設者は主イエス・キリストであつた」という本文の共通性を念頭に置くと、「パンドラの匣」本文で固パンが述べている「壓制や束縛のリアクションとしてそれらと同時に發生し闘争すべき性質」を持った〈自由思想〉は、塚本の論じる「世界の舊秩序舊體制を滅茶苦茶に叩き壊すこと」と同様の意味を持つものであると考えられる。

〈自由思想〉と〈新秩序〉はどちらも「弱い立場の人々を救う」ために掲げられたものであり、共通性が指摘できる。つまり、「パンドラの匣」作中における〈自由思想〉とは、塚本の「新秩序の創設者はイエス・キリストである」という解釈を内包するものとして機能しているといえる。

最後に、〈自由思想〉と〈新秩序〉の性質をまとめ直し、両者が示している事柄が同じものであると捉えられるか、再び確



認する。

まず「われらの新秩序」における〈新秩序〉が、次に挙げる三点の性質を持つていることを確認した。一点目は、〈新秩序〉の「建設者」、つまり初めに創始したのがイエス・キリストであったこと。二点目に、〈新秩序〉が生じる契機にあたる、「恥づべき慣性の法則」が社会全体に充満した「舊秩序舊体制」は批判すべき対象であり、「舊秩序舊体制」の破壊の必要性があること。さらに三点目として、この「舊秩序舊体制」を破壊すること、で、「弱者を縛る不法の鎖」を切り断つ効果があることである。

続いて、〈新秩序〉の受容が考えられる〈自由思想〉についても同様に確認する。〈自由思想〉の持つ性質は次の三点であると考えられる。一点は、「自由思想の本来本元は、キリスト」であること。二点目に、〈自由思想〉は本来「壓制や束縛のリアクションとしてそれらと同時に發生し闘争すべき性質」、すなわち「破壊思想」ともいえる性質を持つていること。そして三点目に、右に示したような〈自由思想〉のあり方は、「時の権力に反抗して、弱きを助ける」ことが主軸になっていることが挙げられる。

このように、〈自由思想〉と〈新秩序〉の性質を比較すると、

共通するあり方が多く見受けられる。

したがって、〈自由思想〉と〈新秩序〉が示している事柄が同じものとして捉えられるか、という問いに対しては、捉えられると結論づけられよう。

以上、本節では「パンドラの匣」と「われらの新秩序」の本文対照を行うことで、「パンドラの匣」作中の本文に「われらの新秩序」の受容がみとめられることを指摘した。しかしながら、本稿では表記上の受容をみとめることに留まらず、「聖書知識」の受容の範囲が「パンドラの匣」の内部、特に作中人物の価値観の造形にまで及んでいることにも言及したい。第三節では、作中に登場する〈かゝるみ〉について考察を進める。

### 三 〈自由思想〉から〈かゝるみ〉へ―受容の発展としての〈かゝるみ〉

ここまでに、「パンドラの匣」と「われらの新秩序」の対照を行い、共通性を指摘することで「パンドラの匣」において「聖書知識」の受容が考えられることを確認した。つづいて、「聖書知識」受容の程度―特に、「聖書知識」がどこまで受容されているか、またどこからが太宰独自の解釈に拠るものか―に加



え、それらの受容が作中の〈かるみ〉にどのように作用するかも考察する。

はじめに、作中に登場し、かつ作品後半の展開において重要な意味を持つ、ひばりが提示した〈かるみ〉という価値観について整理する。作中で初めて〈かるみ〉に言及するのが次に示す箇所である。ひばりは、〈かるみ〉というものを次のように解釈している。

君、あたらしい時代は、たしかに來てゐる。それは羽衣のやうに輕くて、しかも白砂の上を淺くさらさら走り流れる小川のやうに清冽なものだ。芭蕉がその晩年に「かるみ」といふものを稱へて、それを「わび」「さび」「しおり」などのはるか上位に置いたとか、中學校の福田和尚先生から教はつたが、芭蕉ほどの名人がその晩年に於いてやつと豫感し、憧憬したその最上位の心境に僕たちが、いつのまにやら自然に到達してゐるとは、誇らじと欲するも能わずといふところだ。この「かるみ」は、断じて輕薄と違ふのである。慾と命を捨てなければ、この心境はわからない。くるしく努力して汗を出し切つた後に來る一陣のそよ風だ。世界の大混亂の末の窮迫の空氣から生れ出た、翼のすきとほるほどの身輕な鳥だ。これがわからぬ人は、永遠に歴史

の流れから除外され、取殘されてしまふだらう。ああ、あれも、これも、どんどん古くなつて行く。君、理窟も何も無いのだ。すべてを失ひ、すべてを捨てた者の平安こそ、

その「かるみ」だ。<sup>(注21)</sup>

ひばりは〈かるみ〉を「あたらしい時代」のもとに成立するとしたうえで、「白砂の上を淺くさらさら走り流れる小川のやうに清冽なもの」であり、「慾と命を捨てなければ、この心境はわからない」と評している。

饗庭孝男氏は、〈かるみ〉について、「聖書からの影響を抜きにしては考えられないものがある」<sup>(注22)</sup>とし、前述した越後獅子の発言を踏まえつつ「所有の放棄と、おのれの命を捨てんと欲するものは、かえつてこれを得る、というキリスト教の思想がそこに内実化されている」<sup>(注23)</sup>と説明している。芭蕉の言葉を借りながらも、その本質は聖書の解釈を抜きにすることはできないという点において、論者も饗庭氏の指摘に概ね同意の立場を示す。しかしながら、「聖書からの影響」という部分については、より厳密に対象を絞ることができるとではないか。「われらの新秩序」が掲載された「聖書知識」は、聖書の再解釈を講じるものである<sup>(注24)</sup>。そうであるならば、本作における聖書解釈に「聖書知識」およびその主筆者である塚本虎

二に拠るものも含まれる、と考えるのが妥当である。

では、塚本虎二の「われらの新秩序」との共通性を確認するため、改めて〈かるみ〉の説明にあたる「慾と命を捨てなければ、この心境はわからない」という一文に注目したい。この一文との共通性を確認できる箇所が「われらの新秩序」の次の記述である。

人間自身がいつまでも慾の固まりであつて、(中略) 舊い舊い人間である限り、如何なる新體制新秩序も結局より醜き惡の温床たるに役立つまでであらう。(注<sup>25</sup>)

このような塚本の主張は、「パンドラの匣」後半でひばりが到達した〈かるみ〉を提示する「慾と命を捨てなければ、この心境はわからない」の部分と表裏一体の関係であると考えられる。「慾と命を捨てる」ことで平安を手にするというひばりの主張は、「われらの新秩序」で「慾の固り」であるかぎり永遠の平和と幸福の世界が実現しないと論じる塚本の解釈と重なるものだと言えるであろう。つまり、塚本によって言及される「新體制新秩序」は、「パンドラの匣」において〈かるみ〉というひばりの獲得した価値観が受け止められる、「あたらしい時代」と重なるのである。

「あたらしい時代」という言葉は、現在までの研究において

戦争、また天皇という存在の重要性とも結びつくものとして受け止められている。東郷克実氏は「〈かるみ〉」の思想は天皇という超越的存在を媒介とする自己放棄・判断停止によってもたらされたものだった(注<sup>26</sup>)とし、〈かるみ〉の内部に天皇の存在が媒介していることを論じている。つまり、東郷氏の論において〈かるみ〉に到達するために必要な土壌である「あたらしい時代」が指している対象は、戦争や天皇という時局的なものなのである。

先行論がこのように展開されるのは、「パンドラの匣」の序盤に、天皇による終戦の詔勅を聞いたひばりの心境として、次のような記述があるためと考えられる。

お父さんの居間のラヂオの前に坐らされて、さうして、正午、僕は天來の御聲に泣いて、涙が頬を洗ひ流れ、不思議な光がからだに射し込み、まるで違ふ世界に足を踏み入れたやうな、或ひは何だかゆらゆら大きい船にでも乗せられたやうな感じで、ふと氣がついてみるともう、昔の僕ではなかつた。(注<sup>27</sup>)

天皇の言葉を聞き、「何だかゆらゆら大きい船にでも乗せられたやうな感じ」と述べるひばりは、友人が送った手紙の一文に対して、次のように共感を示している。

「いまの青年は誰でも死と隣り合せの生活をして來ました。敢へて、結核患者に限りませぬ。もう僕たちの命は、或るお方にささげてしまつてゐたのです。僕たちのものではありませぬ。それゆゑ、僕たちは、その所謂天意の船に、何の躊躇も無く氣輕に身をゆだねる事が出来るのです（中略）」といふ君のお手紙の言葉には、かへつてこつちが一本やられた形です。（注28）

以上のような、「或るお方」、つまり天皇に「何の躊躇も無く氣輕に身をゆだねる」姿勢が、先行論で〈かるみ〉と結び付けられてきたのである。

ただ、天皇に自己の行く末を委ねる姿勢は〈新しい男〉という価値觀をひばりが主張していた時期に支持されていたのであり、最後にひばりが達する〈かるみ〉は自己放棄や判断停止によつて構成されたものではないといえる。むしろ、〈かるみ〉を実感したひばりは、作中終盤で「あとはもう何も言はず、早くもなく、おそくもなく、極めてあたりまへの歩調でまっすぐに歩いて行かう」（注29）と、自ら進む様子を見せているのである。このように、ひばりが〈かるみ〉の境地に到達した部分を改めて確認すると、戦後や天皇という観点のみでは説明できない問題がある。それが聖書、より厳密に述べると「聖書知識」

の受容にかかわる問題であり、それらを解明する際に重要なものが、本論で提示した「われらの新秩序」の受容を分析することなのである。塚本虎二によつて再解釈された聖書、あるいはキリスト像の解釈、つまり「新秩序の建設者は主イエス・キリスト」であるというが〈かるみ〉の要素に含まれていることは先ほど本文を挙げて説明した。本作の根底にある受容を突き止めたとき、まず目を向けるべきは戦後や天皇といった時局上の問題ではなく、聖書を起点にした解釈であろう。「あたらしい時代」が何を指すものか、どのような情報や主張に依拠したものかを改めて問い直すことで、〈かるみ〉の新たな捉え方、すなわち、聖書を観点の中心とすることでしか発見できない、〈かるみ〉の位相を目にすることが可能なのである。

以上の考察を経ると、〈かるみ〉の根底には「聖書知識」の受容が色濃く表れていることがわかるのであり、加えて、「われらの新秩序」と「パンドラの匣」を対照させることによつて、〈かるみ〉の本質に饗庭氏の言及する「聖書の影響」を改めて確認できるのである。

## おわりに

本稿では、「パンドラの匣」に見られる「聖書知識」の影響として、次の二点について言及した。

第一に、「聖書知識」受容の時期について、現在の研究で明らかになっているより以前の受容がみとめられることである。現在、「パンドラの匣」と「聖書知識」のかかわりを見る研究では、太宰治が「聖書知識」を購読していた一九四一年以降に発表された論文に指摘が留まっている。しかしながら、太宰は一九三五年より「聖書知識」を知人の寄贈によって読んでおり、特に一九三九年に三鷹へ転居して以降は、その密接なかわりが指摘されている。したがって、購読以前にも関わらず、特に密接な関係にあった時期に発表された「聖書知識」の影響についても、目を向ける必要がある。

このような論点を踏まえ、第二に、一九四一年の「聖書知識」に掲載された巻頭論文「われらの新秩序」を取り上げ、本文対照を中心に「パンドラの匣」における影響関係について分析した。

分析と考察の結果、登場人物の男たちが〈自由思想〉について意見を交わす場面に、「われらの新秩序」との関連性を確認

した。特に、作中で語られる〈自由思想〉と「われらの新秩序」で提示された〈新秩序〉は、使用された語彙こそ異なるものの、それらが指し示すものは互いに重なり合う内容であるとともに、塚本虎二が「われらの新秩序」でのみ使用した言葉との関連性が読み取れ、受容があったということが確かめられた。また、そこには塚本の聖書理解を太宰が受容したうえで、独自に理解を深めたと考えられる部分もある。それが、「パンドラの匣」終盤に結実する〈かるみ〉というひばりの今後のあり方として描き出されているのである。

ここまでの考察より、購読以前の「聖書知識」からの受容も認められるという結論に達した。太宰が購読していた期間（一九四一年から一九四六年）のみではなく、知人から寄贈されていた時期の塚本の主張も確認することができる。したがって、購読以前の「聖書知識」からの受容が認められることを明らかにした。

また、本稿で確認してきた本文との対照によって、〈かるみ〉の本質にも同様に「聖書知識」の影響を指摘できることも併せて言及した。〈かるみ〉の本質は、饗庭氏の指摘のとおり、聖書とのかかわりによって成立しているものであると考えられる。しかしながら、現在までに〈かるみ〉の根幹となる聖書解

釈が何に拠るものかは明らかでなかった。本稿では、「われらの新秩序」を確認することによって、〈かるみ〉の生成要素のひとつに「聖書知識」、あるいは塚本の聖書解釈があることを指摘した。

特に、「バンドラの匣」において〈かるみ〉が受け止められる土壌になっている「あたらしい時代」に注目し、考察した。現在までの研究で「あたらしい時代」という言葉は、戦争や天皇など、時局と強く結びついたものとして考えられてきた。しかしながら、「あたらしい時代」という言葉こそ、「われらの新秩序」における「新體制新秩序」とつながるものであり、「聖書知識」からの受容を読みとることができるのである。

以上、本稿では、現在まで言及のなかった購読以前の「聖書知識」からの受容がみとめられること、またその受容が作中に登場する〈かるみ〉の生成要素にまで及ぶものであることに着目し、分析を進めた。この分析により、今後の「バンドラの匣」作品解釈に聖書、および「聖書知識」との影響関係に注目することの必要性を明らかにしたこと、加えて今後の作品解釈に新たな見方を切り開く読みの可能性を提示した点に本論の意義がある。

注1 太宰治著『太宰治全集』第九卷（一九九八年、筑摩書房）

内「解題」より。以下引用。

（前略）この作品は太宰治の愛読者であった木村庄助の病床日記を素材に書き下ろされ、『雲雀の聲』（二百枚）という表題で小山書店から刊行されるはずであったが、発行間際の昭和十九年十二月に印刷所が戦災で全焼したために、印刷中の『雲雀の聲』の原稿は消失し、太宰治の手元にあった校正刷だけが残った。その校正刷をもとに内容を敗戦後の出来事に書き改めて執筆したのが「バンドラの匣」であったという。

2 注1に同じ。

3 木村重信編『木村庄助日誌―太宰治「バンドラの匣」の底本』（二〇〇五年、編集工房ノア）

4 注3に同じ。木村氏は日誌の内容が「『バンドラの匣』の「マア坊5」の次のような会話と重なる」とし、以下の場面との共通性を指摘している。「しよつてるわ。泣くもんですか。泣くわけがないぢやないの。」（中略）「あたしが泣かなくなつて、ひばりには、泣いてくれる人がいくらでもあるわ。」ちよつと考へてから、「三人、いや、四人あるわ。」「泣くなんて意味が無い。」「あるわよ。意味がある

わよ。」と強く言ひ張つて、それから僕の耳元に口を寄せて、「竹さんでせう? キントトでせう? たまねぎでせう? カクランでせう?」と一人々々左手の指を折つて數へ上げて、「わあい。」と言つて笑つた。」

- 5 東郷克美編「別冊國文學・太宰治事典」(一九九四年五月、学燈社)

- 6 田中良彦著『太宰治と「聖書知識」』(一九九四年、朝文社)  
7 注6に同じ。

- 8 鈴木範久・田中良彦編著『対照 太宰治と聖書』(二〇一四年、聖公会出版)

- 9 津島美知子著『回想の太宰治』(一九七八年、人文書院)  
10 注6に同じ。

- 11 塚本虎二著「われらの新秩序」「聖書知識」第二二八号  
(一九四〇年八月、聖書知識社)

- 12 注1に同じ。「パンドラの匣」内「死生」2より。

- 13 注1に同じ。「パンドラの匣」内「マア坊」2より。

- 14 注1に同じ。「パンドラの匣」内「幕ひらく」1より。

- 15 注11に同じ。

- 16 注1に同じ。「パンドラの匣」内「固パン」4より。

- 17 注11に同じ。

- 18 二〇二〇年一〇月一五日、『塚本虎二著作集』全一〇巻と『塚本虎二著作集続』全八巻(一九七九〜一九八六年、聖書知識社)を対象に本文確認の調査を行った。なお、「われらの新秩序」は『塚本虎二著作集続』第四巻(一九八五年、聖書知識社)に収載されている。

- 19 注1に同じ。「パンドラの匣」内「固パン」3・4より。

- 20 注11に同じ。

- 21 注1に同じ。「パンドラの匣」内「花宵先生」7より。

- 22 饗庭孝男著『太宰治論』(一九七六年、講談社)

- 23 注22に同じ。

- 24 注6に同じ。以下引用。「『聖書知識』は聖書の研究と無教会主義の伝道を目的にした月刊誌(太平洋戦争末期は隔月発行のこともあった)で、昭和三十八年六月(通巻三九七号)まで発行された」

- 25 注11に同じ。

- 26 東郷克美著『太宰治の「キーワード」からみ・ユートピア』  
：「國文學 解釈と教材の研究」第三六巻四号(一九九一年四月、学燈社)

- 27 注1に同じ。「パンドラの匣」内「幕ひらく」4より。

- 28 注1に同じ。「パンドラの匣」内「マア坊」1より。

29 注1に同じ。引用は「竹さん」6より。

本論文の内容は、令和三年六月二三日に本学にて行われたノートルダム清心女子大学日本語日本文学会での口頭発表に基づきます。発表に際し御教示を賜りました皆様に、厚く御礼申し上げます。

（こばやし はつね／本学大学院博士前期課程）